

二〇二一年度 推薦入学者選抜試験問題

小論文



〔設問〕 次の文章を読んで、(A)本文の要旨を二百字以内でまとめ、
(B)「できなくなることでできるようになること」について
あなたの考えを四百字以内でまとめなさい。

できない (Disable) ということを、何か身体を見舞う事実として実体的にとらえてはいけない。「できない」というのは、たしかに肉体的な制限によつてできないこともあるが、ある社会的・時代的な条件のもとでそうであるにすぎない場合や、ある「できる」ことの基準があつてそこから「できない」とされるにすぎないことが多い。

老いにおいて、できないということをは問題とは考えない。それは遅れでもなければ、不適応でもなく、なおさら矯正されるべきものでもない。その意味では、同じことが〈障害〉についても言える。できないことを「できる」ことの埋め合わせるべき欠如と考えるのではなく、「できない」ことそのことの意味を考え、そこからあえて言えば、「できなくなることでできるようになること」というか、かならずしも「できる」ことをめざさない、そういう生のあり方をこそ考えねばならないであろう。ノーマライゼーション(ノーマル化)ではなく、ノーマル(普通・正常)という規範的な概念そのものを、限られた概念として相対化してゆくときに、批判的にもはたらく視点としてである。

こういう視点に立つことを教えてくれたのは、ピアニスト・館野泉さんのコンサートだった。

長年お住まいになっているフィンランドでのリサイタルで、最後の曲を弾き終わろうかというときに、右手が利かなくなつた。かろうじて弾き終え、お辞儀をしてステージを去ろうとして昏倒した。しばらくしてあらためて見ると、「陸々と盛り上がつていた腕の筋肉はなくなつて、その付け根から、干された鳥賊のように皮膚がぶら下がつていた」。脳出血が館野さんを襲つたのだつた。

数年後、日本で開かれた「復帰リサイタル」に行つた。左手だけによる演奏は、バッハの無伴奏バイオリン曲をブラームスが編曲した「シャコンヌ」から始まつた。正直を言えば、はじめはおそるおそる凝視していた。指さばき、ペダルを踏む足先の動き、右手の位置、そして表情を、^いである。単音が打ち鳴らされ、厚い^いその音色に引き込まれそうになりながら、それでもまだ訝つていた。ひきつるような指の苦悶が、その面もちにふとよぎるのではないのか、低音から高音まで一気に旋律を走るなかわずかに音の隙間ができるのではないのか、その音の隙間を、聴いているわたしが想像力でつないでいるのではないのか……と怪しんでいた。が、そんな生意気は数分でぶつ飛ばされた。鉄線のような緊張感が漂つているのに、どこかおおらかな、まろみのある音、ふくらみのある音色。幻の右手が連弾していると思えな

い。緩急のきいたどつしりした曲想、ときにその枝葉が涼風にそよぐような心地よさである。ふたたび弾こうと氣を立てなおすまでの悔しさと悲しみは、想像を絶する。残された手で弾くというよりは、からだ全体の動きをそつくり入れ換える必要があつただろう。弦楽器のように旋律をふくらませたり、しなを作つたりということもできない。弾くだけ、叩くだけ、ふれるだけの鍵盤に、ごまかしはきかない。左から新たな楽音を紡ぎだすその仕方を手に入れるまで、いつたいどれほど長いトンネルをくぐつたことだろう。

五本の指しか使えないというのは、たしかに制約である。だが、十本の指しか使えないというのも制約である。ひとが不断に息を継がねばならないのと、ついに空を舞うのができないのと、同じように。問題はそこで何をつきつめるかだ。そこに何が訪れるかだ。そのとき、制約はもはや限界ではなく、ひととその歴史を超えたある新しい価値のかたちとなる。ある時代、ある場所、ある両親の下に生まれたことが、そのひとが生みだす「作品」に厚みをあたえこそすれ、もはや「制約」でもなんでもないように。

このように、ひとは Disable な状態のなかで、人間であるということの条件により深く

向きあっている。

自分のことが担いきれない、そういう不完全な存在という意味では、だれもが傷や病や障害を普通のこととして抱え込んでいる。そのかぎりでは、勤労者や専業主婦の支援も、老人介護や障害者介助や育児も、基本的には同じ視点に立つべきだと思う。そういう視点から法や社会制度のあり方を見なおす必要があると思う。

「世話になるばかり、迷惑かけるばかりで、ひとに何もしてあげられないこんなわたしでも、まだここにいていいのだろうか」……。そんな悲しい問いが老いとともに頻りにもたげられるようになる。理由ははっきりしている。わたしたちの社会がとことん「する」の論理で成り立ってきたからである。

ひとの存在価値を業績で測る、何をするにも能力と資格を問題にする、何をするにも効率と成績を問題にする……。子ども時代から定年を迎えるまで、ずっとそのチェックが入る。わたしたちはたえず資格を問われる社会に生きているのであって、飼育、製造、調理、流通、販売の複雑なシステムのもとで、日々それにふさわしい行動の能力が求められる。警察官、消防士、教師、医師・看護師のみならず、調理師、介護士、カウンセラーまで、何になるにも、試験がなされ、資格が問われる。何をするにも資格と能力を問われる社会というのは、「これができたら」という条件つきでひとが認められる社会である。裏返して言うと、条件を満たしていなかつたら不要の烙印が押される社会である。そのなかで、ひとはいつも自分の存在が条件つきでしか肯定されないという思いをつのらせてゆく。自分が「いる」に値するものであるかどうかを、ほとんどポジティブな答えがないままに、恒常的に自分に向けてようになる。会社で、学校で、そして家庭のなかでも、「自分にしかないものは何か？」という問い、あるいは「自分探し」とか「自己実現」という強迫観念に責め苛まれ、その答えが見いだせなかつたら——そう、たいていのひとはそれを見いだすことはできない——、こ

んどは「わたし、ここにいていいの？」というひりひりした問いにさらされることになる。

自己の「死」にそれと意識しないままに触れつづける、と言つても大げさではない。条件つきでもその不安に苛まれる。その不安を鎮めるために、条件をつけないで自分の存在を肯定してくれるようなひとを求め、自分をこのまま認めてくれるひと、自分の存在を条件つきではなく肯定してくれるひとを求めようになるのである。このままのこの自分に関心をもつていてほしい、自分をずっと見守っていてほしい、というわけだ。このように他人に自分の存在理由をあたえてもらおうとしているうちに、他人が見てくれないと何もできないようになる。

が、たがいが存在をそっくり肯定しあうような関係は重すぎる。裏返して言えばそれは、他人にこの自分の存在をそっくり肯定してほしいという、深い相互依存の関係でもあるからだ。そのひとがいないと生きてゆけないという、逆の危機にひとを誘い入れるからだ。

いまわたしたちにほんとうに必要なのは、そういうねっとり密着した関係ではなく、距離を置いてたがいに肯定しあう、そういう差異を前提とした関係なのだろう。〈わたし〉という個は、自己自身との関係のなかでではなく、〈わたしたち〉の共同的な組織のなかで編ま

れつつ、いわばその特異な点としてかたちづくられる。他者たちによる承認はそこで大きな役割を果たすが、受け身でそれを待っている、相も変わらず依存のなかにしかいられない。さて、先の「する」の論理からすると、unableということには何の意味も価値も見いだされ

られないわけになる。だが、「できない」ということは、言うまでもなく、「する」ほうから見るから「できない」のだ。そして「できない」ほうから「する」を見ると、あることを「できない」こととしか見えなくさせている「する」の仕組みのほうにむしろ浮かび上がってくる。「できない」ことの多くは、「できる」と「できない」ことを仕分けて、「できる」ことのほうから行動の環境がかたちづくられ、行動の制度が組み立てられているからこ

そ「できない」にすぎない。たとえば、身体に障害があるひとが地下鉄にひとりで乗れないのは、段差がいろいろな場所にあるからであって、床をなだらかにエレベーターを完備すれば、ひとりで乗れるのである。「できない」ことを「できる」ようにするより、「できな

い」ことを「できない」こととなくすことのほうが重要だということだ。

(鷲田清一氏『わかりやすいはわかりにくい？—臨床哲学講座』により、一部を改変した)